

構築会
2000
だより 

構築会だより

目 次

会長挨拶	3
高原 疊 次 (C65)	
専攻だより	4
土木工学専攻：出口 一郎	
建築工学専攻：柏原 士郎	
名譽教授の先生からのおたより	6
伊藤 富雄	
前田 幸雄	
榎木 亨	
紙野 桂人	
脇山 廣三	
村岡 浩爾	
特集「21世紀の都市について思うこと」.....	13
滝田 裕久 (C65)	
山田 哲司 (C65)	
三好 庸隆 (A72)	
渡辺 豪秀 (A78)	
田村 恵美 (A96)	
卒業生だより	18
50周年：池田 功 (C65)	
笹倉 光雄 (C65)	
原田 修 (C65)	
40周年：小川 裕章 (C60)	
麻山 進 (A60)	
30周年：田端 竹千穂 (C70)	
木林 長仁 (A70)	
20周年：多田 元英 (A80)	
10周年：中塚 光一 (A90)	
支部だより	27
大阪支部：石田 貢 (C73)	
兵庫支部：志波 秀明 (C71)	
東京支部：岡田 純一 (C75)	
愛知支部：矢野 修一 (C74)	
広島支部：加地 健一 (C71)	
2000年度役員会報告	32
事務局だより	36

日本次会議事

大 目

8	選出委員会
	(22) 大 領 類 論	
9	日本改憲委員會
	題 一 四 出：東京帝大木工 碩 士 稲 田：東京帝大農科	
10	日本改憲のさへ過去の對外政策
	農 寶 類 論	
	農 地 田 前	
	空 木 墓	
	人 俗 復 兴	
	三 齊 山 郡	
	開 荒 園 林	
11	日本改憲のさへ市町の問題 [21回] 楽群
	(22) 大 島 田 新	
	(22) 田、晋 田 山	
	(22) 田、晋 田 三	
	(22) 表 連 重 道	
	(22) 清 勝 伴 田	
12	日本次会議事
	麻 田 醍：半圓02	
	風 江 食 妻	
	森 田 風	
	草 潤 田 小：半圓03	
	(A9) 旗 山 雄	
	野千音 駿 田：半圓04	
	(A10) 月 亮 井 木	
	(A8) 英 沢 田 是：半圓05	
	(A8) 一 武 暈 中：半圓06	
13	日本次会議事
	角 田 仁：朝支頭大	
	表 類 志：朝支頭兵	
	神 田 順：朝支軍事	
	一 研 強 夫：朝支財政	
	舞 鹰 順 一：朝支鐵道	
14	5000円賛助金對手平
15	日本改憲委員會

ごあいさつ

構築会会長 高原 疆次 (C65)



激動の世紀といわれる二十世紀も間もなくその幕を閉じようとしています。構築会会員の皆様方にはそれぞれの社会の場でお元気にお活躍のことと存じます。

二十世紀をどう評価するかは人によって様々な違いがあるでしょうが、この世紀における科学技術の爆発的進歩は誰しも認めるところではないでしょうか。とりわけ本世紀末にかけての情報通信、生命科学といった分野での劇的進歩は広く社会システム全般に、そして深く文化意識や人間観といった価値観にまで作用し、その変革の予感がそこはかとないう時代の不安感を醸し出していると言っても過言ではないでしょう。また一方で私達はこの地球環境が有限のものであり、薄氷の上を歩くような細心の注意と自己管理を行わない限り人類の永続的生存と発展も有り得ないことを認識せざるを得なくなっているのです。

二十世紀末の十年間程、我国はいわゆる“バブル”崩壊後の後遺症に苦しんでいます。「失われた十年」などと表現する向きもありますが、たしかに経済的崩壊現象と先述したような社会環境の変化がほぼ同時期に重なって停滞症状が深刻化したことは否めないでしょう。しかしこの十年は決して「失われた」時ではなく新たな社会構造、社会意識を模索した十年であると思いたいのです。

二十一世紀に入ってもしばらくはその「模索」を続けなければならないと思います。しかしそのうちにできるだけ早い段階で新しい社会の有様が見えてくるに違いありません。それがどのようなものになっていくのか情報通信技術の加速度的進歩だけ考えても予測もつきませんが、逆にほとんど変化しないと思われる前提条件は何かを考えるとおおよそのパラダイムは浮かんでくるように思います。

その一つは地球環境の有限性ということでこの命題は二十一世紀に入って先鋭化こそそれ変わることはないでしょう。二つには人間の生理的、精神的欲求の本質的部分はさほど変わらないのではないかということです。要するに人はいつの時代も相互に触れ合い交流できる空間をつくって生きるということ。であるとすればすこし逆説的に聞こえますが、都市は最も人間性に適した省資源的居住形態なのかもしれません。二十一世紀には都市が人間社会の中で益々重要な空間として認識されるだろうと思うのです。

超過密化、巨大化した都市の持つ負の側面から特に大都市居住は余り肯定的に語られていませんでしたが、近年大都市居住を良い意味で見なおす兆しも見え始めています。古代文明の発祥以来、都市空間をつくってきたのは土木、建築という構築技術です。しかし、人口が快適に様々な活動を展開する空間をつくりあげていく技術は「快適」という価値観活動の態様が変わりつつある二十一世紀に向けては様々な課題を抱えているとも言えます。大阪大学における大学院改革即ち人、社会、物流、環境で結びつく地球総合工学系への再構成などはその先取りではないでしょうか。構築会も二十一世紀に入っていく中で変わっていくでしょうし、またいかねばならないと思います。会員相互の交流と会の活動についての議論を重ねて世に存在感のある構築会として存続発展していくよう会員の皆様方のご協力を心からお願いいたします。

(20) 土木工学専攻の近況

専攻長 出 口 一 郎 (C71)

専攻長1年生となってほぼ6か月が経過しました。時間的にはほぼ半分を消化したわけですが、実質的な仕事量からするとすでに全体の3／4程度はこなしたのでは？と勝手に理解しております。専攻長の1つの重要な仕事であります、土木工学専攻の近況を報告させていただきます。村岡浩爾先生が3月に停年退官され、大阪大学名誉教授となられました。現在は大阪産業大学に新設される人間環境学部教授としてお元気で活躍されております。同じく3月に水システム学領域の村岡治道助手が辞職され、(株)建設技術研究所に就職されました。8月には、留学生相談室小野正順講師が、高知高専助教授として転出されました。一方、新たに建設省土木研究所から小野潔君と大学院博士後期課程を修了したばかりの荒木進歩君がそれぞれ構造工学領域及び国土開発保全工学領域の助手として着任されました。いずれも新進気鋭の研究者で、今後の活躍を期待しているところであります。

すでにご存じのことかと思いますが、この春2年次に進学した学生は、昨年「地球総合工学科」に入学した学生で、2年に進学する際に各学科目に分属された「分属第1期生」ということになります。これにより、土木工学科には38名の学生と2名の留学生が分属されました。最近特に目立つのは、各学年に必ず数名の女子学生が含まれていることです。ちなみに学部2年から4年まで合計9名の女子学生が在学しております。

就職、進学についても少々様変わりしてきました。4年生50名中、大学院進学予定者が33名、地方公務員6名が主なところで、いわゆる総合建設業に就職が内定している学生は2名です。一方、大学院学生の就職については、ほぼ例年通りで、39名(内6名は地球総合工学専攻在籍者)中、中央官庁を含む公務員が10名、総合建設業11名、橋梁・重工関係5名、コンサルタント5名、銀行2名、その他3名が内定しております。不況からくる就職難ということですが、幸い就職を希望するほぼすべての学生の就職先が内定しました。卒業生の採用に配慮いただいた先輩の方々に厚くお礼申し上げます。しかし、残念なことに、大学院博士後期課程に進学する学生は、今のところおりません。大学院重点化が完了したにもかかわらず、大学院博士後期課程の定員の充足率はまだまだ不十分であります。博士後期課程は社会人の方々にも広く門戸が開かれておりますので、ご高配のほどよろしくお願ひ申し上げます。

平成13年には行革の一環として省庁再編が行われます。国立大学も数年先をめどに独立行政法人となることが予定されております。今後は、今まで以上に様々な形での大学の評価がされることになるはずです。いかなる評価にも耐えられるように、努力いたしておりますが、卒業生の方々のさらなるご支援をお願い申し上げる次第であります。

建築工学専攻の近況

基　富　難　相　性　教　育

専攻長 柏 原 士 郎 (A66)

二十世紀も終わり、二十一世紀にいよいよ突入しようという現時点で、大学の内外において総てが大きく変わろうとしています。厳しい建設業界の状況はその再編も含めて、根底からその体質を変えようとしています。大学も社会の急激な変化に応えるかたちで、国立大学の独立行政法人化への移行、学部、大学院研究科の再編や運営システムの改革が緊急の検討課題となっています。さらに、建築教育にとっては、国際化に対応した建築家資格や技術者資格とその第三者機関による認定問題等、なにを教育すべきか、どこまで教育べきかといった本質的な課題を突きつけております。まさに黒船の襲来に安眠は許されない状況です。

このような厳しい環境条件は学生の就職状況にも如実に現れています。少数の特に優れた人材を確保しようとする求人サイドの要求から、求人時期が異常に早くなり、選考も大変厳しくなっています。そのためこれまでのような学校推薦の意味もあいまいになり、結果として大学サイドとしては掛け持ち受験を認めざるをえない状況です。せっかく合格通知をいただきても、辞退するケースが生じ、先輩の方々にご迷惑をおかけすることもありますが、このような事情をご理解いただきお許し下さいますようお願い致します。

本年度の最も明るいニュースをお知らせ致します。名誉教授の五十嵐定義先生が2000年日本建築学会大賞を受賞されました。表彰業績名は「建築構造工学に関する研究と発展に対する貢献」であります。身近な先生が学会最高の栄誉となるこのような賞を受賞されたことに心よりお祝い申し上げますと共に、私達のこれから活動に大きな励みとなる力を与えていただいたことに感謝致します。

専攻に関連します人事を報告致します。まず、1月に舟橋国男教授が評議員に選出されました。学内激動の時期に執行部の一員として活躍していただけることは、専攻として心強い限りです。吉田勝行教授が4月より新設の全学研究機関であるサイバーメディアセンター(サイバーコミュニティ研究部門)に移られました。建築工学専攻も兼任され、学生の教育にご尽力いただいております。五月に木多道宏学内講師が助教授に昇任され、六月には博士課程の李斌君が助手に任用されました。お二人とも建築デザイン学講座(建築・都市計画論領域)に所属され、工学部のキャンパス計画を担当されます。研究室をお手伝いいただく事務補佐員として、四月に岩下文香さん(建築・都市人間工学領域)、五月から木下千晶さん(建築・都市環境工学領域)にお願いしております。

建築工学専攻の近況を「構築会だより」という情報媒体を使ってお伝えしておりますが、この情報化の時代、変化のスピードに充分対応出来るか心もとない限りです。最新の情報を的確に伝えるべく、インターネットのホームページを充実させるために専攻内にワーキンググループを設置し、専攻に関する情報を積極的に発信したいと考えております。ご意見をぜひお寄せ下さい。この厳しい時代、皆様のご鞭撻、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

構築22年の思い出(その3)

(66A) 土木工学論文集

名譽教授 伊藤富雄

伊藤富雄先生——(自分のことを書くのは気が引けるので、記念誌などに載ったほかの方の記事を抜き書きし、つづり合わせることにする。)

昭和37年4月第6講座(交通工学)が8年ぶりに新設され、23年12月に講師から助教授になっていた伊藤先生が教授に昇任された。先生の専門はトンネル力学で、トンネルの周辺応力の弾性解析、砂層内のトンネルの坑頂圧、地盤が粘弾塑性体の場合におけるブラインドシールドの推進抵抗力と周辺地盤の挙動、任意形状のトンネル覆工に作用する地圧、NATMその他数多くの重要課題を解明し、トンネル及び地下鉄道の設計施工上多大の貢献をし、土質基礎工学の分野でも、局部載荷を受ける軟弱地盤の変状、杭のネガティブフリクション、地すべり防止杭、湿地ブルドーザの推進力と沈下量など、幅広い研究を行い、大きな業績を挙げられた。また先生は、学園紛争の多難な時期に評議員、工学部長を務め、日本学術会議の会員として活躍されるなど、行政上残された足跡も大きい。

先生は、好奇心と反骨の精神に富んだ特に博識な方で、物事を広い視野から見て柔軟に判断を下す能力に優れておられた。そのため、講義を脱線したりなどして独特の節回しで始まる雑談の方が、為になり心に残っているという卒業生が多い。

先生は、昭和59年4月に停年退官の後も、日本学術会議会員、第五部長、大阪工業大学の教授、学長、名譽教授として長年元気に活躍し、現在は(財)日本地下水理化学研究所の理事長をしておられる。

伊藤克三先生——第6講座に引き続き、昭和38年4月第7講座(衛生工学)が設置され、大阪市立大学助教授の伊藤先生が翌年1月担当教授として着任された。

先生の専門は、日照、採光、照明、音響など建築環境工学の各分野にわたり、特に、刺激一感覚反応の基本的な関係に立脚した新たな照明設計法の開発、居住環境において日照の果たす役割の分析と日照時間に対する居住者の反応、視線の動きに伴う目の順応の変化が見え方に及ぼす影響など、多くの研究業績を挙げられた。

先生の趣味はバラの栽培であるが、それは玄人はだしの腕前で、(財)全国バラ会京都部会長としてバラ日本一のコンテストを開催したり、指導や審査をしておられた。このような優雅な趣味をお持ちのためか、構築工学科で初の女性文部教官・助手が誕生したのは先生の講座であった。

先生は、昭和56年4月に停年退官の後、直ちに摂南大学教授に就任されたが、現在はそれも停年退職し、悠々と趣味を楽しんでおられる。

なお、昭和39年4月には、第8講座(建築設備学)が新設されたが、その担当教授は未決定のまま、建築工学科は2学科に改組分離した。

室田 明先生——田中清先生が亡くなられた時、その後継者は当然室田先生であったが、まだ35才の若さのため昇任を先送りしていたところ、他大学から自薦他薦の候補者が現われ、雑音が入りかけたので、昭和39年9月第5講座の教授に昇任され、構築第1回卒業生の教授第1号がめでたく誕生した。

先生の専門は応用水理学で、世界で例を見ない実験装置を製作して行われた高潮の発生機構と変形に関する研究は内外の注目を集め、砂粒の挙動解析、山地からの土砂生産と河道における土砂輸送、都市河川の洪水処理などの優れた研究業績は、防災工学上寄与するところ誠に大なるものがあった。さらに先生はこれらの研究を通じて優秀な門下生を多数養成され、現在、大学の教

副幹の言イヘリと主幹のさへり代へハ

前田 幸 翁 故過譽合

授は日本で10名、韓国2名に及び、官民の諸機関で活躍中の研究者も数多い。卒業研究のため各講座に分属する学生が先生の講座だけ特に優秀だったとは思われないので、先生の研究指導能力は抜群であった。また、評議員に選任されて大学運営の枢機に参画された。

先生は、平成2年3月に停年退官され、直ちに大阪産業大学の教授に就任、さらに学長となり元気に活躍しておられたが、平成8年8月8日、69才の若さで急逝されたのは惜しんでも余りあることであった。

助教授の方々 — 助教授に就任されながら結局教授になられなかった先生が6人、その思い出を以下就任順に書き留めておきたい。

前田敏男先生は、昭和25年4月、在任1年余りで京大助教授に転出され、その後、教授に昇任、学園紛争の多難な時に工学部長、総長を歴任されて、大学行政上偉大な功績を残された。また専門の建築環境工学の分野で顕著な研究業績を挙げ、建築学界の大御所になられたが、残念なことに、平成3年7月24日に逝去された。

馬場善雄先生は、昭和26年4月京大助教授から着任されて以来、新潟地震などにおける地盤液状化の調査研究、上町断層を発見した大深度ボーリング調査、大著「大阪地盤図」の執筆・編集について中心的役割を果たすなど、地盤工学上多大の貢献をされた。しかし、昭和44年2月24日、49才の若さで逝去されたのは痛恨の極みであった。

赤尾親助先生は、昭和30年4月に助手から昇任の後、40年4月大阪工業大学教授に招かれ、学務部長などの要職を経て名誉教授になられた。

小阪義夫先生は、昭和30年4月に助教授となり、40年4月名古屋大学教授に昇任し、軽量骨材コンクリートの材料並びに構造部材としての弾塑性性状に関する研究その他によって、コンクリート工学上多大の貢献をされて、名大建築の柱石になられた。停年退官後は直ちに名誉教授の称号を受け、関西大学教授に就任されたが、わずか5ヵ月後の平成2年8月21日に急逝されたのは誠に残念なことであった。

鳥海勲先生は、昭和39年10月助教授に昇任後、同年11月さらに福井大学教授に昇任されて、建設工学科の新設に尽力し、工学部長に選任されると福井大学の改組を実現されるなど、行政上多大の功績があり、また、地盤振動と構造物の相互作用に関する優れた研究業績によって、耐震工学に寄与するところも大であった。先生はテニスやマラソンが得意なスポーツマンで、停年退官後も大阪工業大学教授に招かれ元気に活躍しておられたが、残念なことに平成12年4月20日76才で逝去された。

波田凱夫先生は、昭和39年12月助教授に昇任されたが、(株)神戸製鋼所に移りたいとの希望が強く、45年3月遂に同所へ転出された。その後、ケーブル構造の大変形解析など優れた研究業績を挙げ、長大吊り橋や長大吊り天井の設計施工上多大の貢献をされた。現在は摂南大学の教授、工学部長として活躍中である。

上記6名の方々のうち前田・小阪の両先生は、構築工学科の講座増設が思うように進まないので、教育研究環境が悪くご自身の前途も暗いために転出されたように思われた。それで私は、構築も逃げ出されないような学科に早くしなければならない、あたら人材を失ってはならないと、当時肝に銘じたことであった。

ハンガリーからの研究生メドベド君の物語

名譽教授 前田幸雄

私が大阪大学に勤務し始めた頃は、工学部の校舎は東野田にあった。ここで1969年から約1年間ハンガリーからの研究生メドベド(G. MEDVED)君を指導した。研究室では松井繁之君や梶川靖治君らが勉強していた。彼は1935年ハンガリー生れで、ブダペスト工科大学を1958年卒業し、溶接工学専攻で1967年同大学院を修了した。研究テーマはスタッジベルの疲労の材料力学的研究であったが、基礎がしっかりしていて優秀であった。帰国後このテーマでブダペスト工科大学のハラシュ教授の下で工学博士を取得した。彼は研究者より技術者の道を歩み、当時の社会主義体制の下で橋梁建設公団の橋梁エンジニアとして数多くの国内の架橋に従事すると共に、他の同盟国で架橋を指導し、次第に頭角を現していった。その後も日本というものの全体に親密さと関心を失わず、私には近況をまめに報告し、又海外ではよく接触してくれた。当時私はIABSE(国際構造工学会)の要職にあって毎年少なくとも一度は欧米に出かけ、メドベド君と交流を深めることができた。彼は、英・独・仏以外にソ連語に堪能であった。1978年モスクワのIABSEシンポジウムからの帰途、日本人グループの当時の東大平井教授、大阪工大の赤尾教授、酒井鉄工の竹内氏、栗本鉄工の村田氏らをメドベド君はハンガリーに招待してくれたことは我々にとって忘れ難い楽しい思い出となった。彼は日本を2回程再訪問して旧交を温めており、更に一層の国内外での活躍を祈った。

しかし乍ら冷戦の終りと共に、旧体制は瓦解し、ソ連の管理から解放されたハンガリーも新しい社会形態に移行することになった。メドベド君はそれ迄の組織の中で新しい流れに乗ることができずに職を失い、別の就職もうまく行かず、又在ハンガリーの外国企業に職を求めたが成功せず、私も含んで日本の友人に助けを求めてきた。しかし乍らどんなに辛くても自分の國の為に働くべきである、というのがアメリカ留学時代に学んだ私の信念であった、彼の就職の世話を断わった。

ところが彼にとって幸いな事に阪大時代の友人、熊本大学の崎元達郎教授が佐賀大学の建設工学科の助教授の職を彼に斡旋し、私が彼を保証する形をとり、奥さんと平成5年来日することができた。挨拶の為に拙宅を訪れた際に日本の大学の教官の心構えと業績について一大決心を彼に求めた。幸いに学問上では彼の語学力と長年の実務経験が役立ったことと、彼の同僚や学生達に対する対応が高く評価されて、契約の更新に恵まれ、平成9年迄在職し、更に熊本大学の土木環境工学科の正教授として引き続き2年間勤務することができ、この3月で退官し、4月に日本を去った。

帰国直前には阪大での特別講演を行うと共に、教室の先生方(松井繁之教授、西村宣男教授、大倉一郎助教授)が中心となり、それに友人が参加して送別会を行い、彼は日本人の暖かい気持にふれて、物質的にも、生活的にも恵まれた日本滞在を楽しんだ筈である。更に日本・ハンガリー友好協会の会長としても活躍し、又彼の存在が刺激となってハンガリーからの教官の来日や学生・研究生の阪大での留学が増加しつつある。メドベド夫妻が御世話になったことに対して、私からも皆さん方に御礼を申し上げたい。

尚、彼は次の書籍を山海堂から1999年2月出版した。ガボル・メドベド著名、成瀬輝男監修・訳、“世界の橋物語”。彼のハンガリー語の原本に改正を加えて英訳し、それを成瀬さんが邦訳したもので、一般人も興味が持てる内容となっている。

ゴミ拾い考

人間環境問題研究会

名譽教授 楢木亨

私が早朝ウォーキングをしながら毎朝ゴミ拾いを始めて既に3年になる。近頃はゴミ拾いをしないと気持ちが落ちつかない。この3年間のゴミ拾いをしているときの自分の気持ちを述べておきたい。

最初1年程はゴミを捨てる人の道徳心の欠如に対する怒りのみであり、社会がこれらの人々にペナルティーを与えるべきと真剣に訴えたかった。しかし2年目頃から怒りと同時にゴミを捨てる人の教育について考えさせられた。即ち家庭教育はどのような教育を受けていたのだろうか？捨てた人の家の中及び車の中はどのような状態になっているのだろうか？といった素朴な疑問と同時に心の教育がされていないのではという危機感をもった。その頃私が会員であった学術会議で「環境と教育」問題が盛んに討議されるようになり、「こころ」の問題が論議されるようになってきた。抽象的な論議に弱い私にとっては退屈な議論の連続であったが、具体的にこの議論をゴミ拾い問題に置き換えてみると色々と考えさせられた。ゴミを捨てるにも、その捨て方は色々あって、ある程度の空き缶をまとめてビニール袋に入れて捨てる人、単に空き缶をポイ捨てる人、鼻紙を無造作に所かまわす捨てる人、また捨てる場所も人の目につきにくい様に捨てる人、なにも考えずに所かまわす捨てる人、わざわざ空き缶だけ1ヵ所に集めて捨てる人などがある。捨てるという行為は同じであっても、そこには大きな差があるよう思われる。即ち人に見えない様に捨てる人は恥をしっている人であり、そこには個人の自由を規制する心が働いている。一方何も考えないでポイ捨てる人は、単に個人主義を自由主義と考えている人であろう。ゴミ捨てが特に公共の場、公園、道路脇、分離帯に多く見られるのは日常生活の中で倫理性の欠如といってしまうのは容易であるが、人の心と教育と環境の相関性を十分に示す問題といえるのではなかろうか。蛇足ながらゴミ拾いをするにも準備が必要で、少なくとも買い物の時にもらうビニール袋、軍手、さらにビニールの手袋を用意してほしい。

さて、ゴミ拾いの途中で都市の美観についても考えてみた。千里近辺は開発後既に40年以上がたち、街路樹も大きくなり道路整備もととのっているにもかかわらず、側道、分離帯は夏草に覆われていることが多く美しい道路という感じはしない。年に1度か2度の草刈りはやっているが、雑草の成長には追いつかない。この草刈りで代表される維持費をせめて今の2倍にしてもらえれば、毎日のジョギング、ウォーキングの人々にいかに喜ばれるかはかりしれない。そうすれば道路の公園化というより公園の中の都市という、すばらしいキャッチフレーズが生まれてくるだろう。これから維持・補修の時代といわれて久しいが、都市が成長するにつれて維持・補修費を増額していくなければ21世紀の新しい都会像は描けない。毎朝のウォーキングの人々の年齢を考えてもこの道路、公園の美観事業は有効な高齢者対策にもなるであろう。

今年の海外旅行から

本 基 聲造音各

名譽教授 紙 野 桂 人

今年は今までのところ2回の海外旅行をしました。最初の1回は2月末に約10日間オーストラリアを訪問しました。主たる目的は首都キャンベラの実態についてこの眼と耳で確かめようと思ったことにあります。幸い小生のゼミで学んでくれた小島泰典氏(A76・78)が文部省からの出向で大使館の一等書記官をしておられたので、現地でのアポイントメントなどいろいろお世話になりました。わが国では首都機能移転が政策課題となって来ましたが、これに関して意見を各方面から求められることもこれあり、この際キャンベラを知っておこうと思ったわけです。

この首都は意識的に旧都メルボルンと世界都市シドニーから距離をとって、コンパクトでクリーンかつ計画性の高い人工都市を造ったもので、あえて高層建築を造らず水と緑豊かな庭園都市として成熟してきました。その意図は国の制度を中心にしっかり継承されて来ています。人工都市でありながら世界から観光客が集るのはこの都市ぐらいのものかもしれません。

シドニー・メルボルン・キャンベラ、この3都それぞれの豊かな個性と自率性を確かめて帰ったというところです。

もうひとつの旅は8月の末から9月の初めにかけ約3週間、ヘルシンキ・ストックホルム・ベルリン・ブリュッセル・パリを訪問しました。EUの実態を確かめようと思ったからです。北欧2都については、旧東欧等とアジア系の観光客の往来が激しくなったことを実感しました。特にヘルシンキは、旧ソ連領の諸都市との交流が自由化しています。ヘルシンキ港から連絡船で約80分、エストニアのタリン(Tallinn)の町に半日旅行が出来ます。この町は中世自治都市の姿を良く残しておりまだ観光ずれしていない所が面白いのですが、あと数年とは言わず観光都市化するでしょう。ペテルスブルグへもビザ無しで1週間程度の船旅が可能です。北欧の新たな可能性を感じた次第です。この都市の郊外にはかつて世界の新都市開発のメッカであったタピオラがあります。どうなったかという興味があって約20年ぶりに行ってみました。そして千里ニュータウンと同じく高齢化が進み、次の時代へどうつなぐかが課題であることを確かめました。20世紀はここでも終ったのです。

ベルリンはいま首都機能整備に追われています。ポツダマー広場一帯のソニー・ダイムラー・ベンツを中心とする都市開発もほぼ姿を見せました。しかしそれは旧東ベルリンの極めて活力に乏しい都市空間の中に孤立しているというのが実感です。ここがEUの中心として機能するにはまだ幾つかの山を越える必要があるでしょう。これに対してパリはいま新たな大都会の混乱の中で、人々の大混雑に見まわれています。1週間の滞在の中で、昔のパリがなつかしくなりました。パリはそれを何に結びつけて行くのでしょうか。EUは変らざるを得ないところに来ています。

近況報告

新井 岳洋

名譽教授 脇山廣三

大阪産業大学に参りました、5年目になり、学部・大学院の講義・演習の方はかなり慣れて参りましたが、今年から学科主任を担当することになり、時間のゆとりがなくなりました。ただ、会議の開催通知や、皆さんの意見収集、作業の割り振りなどに、eMailで連絡出来るようになり、自宅にいてもかなりの事がこなせるのは有難いのですが、原稿などではごまかしの効かない事態になり、苦しいこともあります。

こちらでは、講義の前期は4月から7月、後期は9月下旬から1月中旬になっており、春の季節は入試関連をはじめとする大学の行事が忙しくまとまった休みを取ることは出来ませんが、8月と9月の初旬は雑用のない休暇になります。お盆の休暇の期間はコスト高なので、8月の下旬から9月の初旬の期間に若干の仕事を兼ねて海外旅行をすることにしています。

例年、ロスアンゼルス・米国内のどこかの観光・サンフランシスコ・ハワイのコースで2週間を過ごすのを定例にしています。米国内の観光として、昨年はサンフランシスコに近いカリフォルニアワインの産地ナパとソノマをドライブし、数箇所のワイナリーでティスティングしワインの里の雰囲気を楽しみました。今年はワシントンDCの観光とし、ホワイトハウスを初めとし、ワシントンモニュメント、リンカーンメモリアル、スミソニアンの自然史博物館、国立航空宇宙博物館、国立美術館などを15分毎に巡回している1日の乗車料\$16のツアーモービルと乗車区間に応じてチケットを購入する地下鉄を利用して見てまわりましたが、とても3日程度の滞在ではほんの一部を見ることすら出来ないように感じました。

ワシントンDCはロスアンゼルスなどと異なり、自分で車を運転しなくても地下鉄とバスを利用すれば市内の移動は簡単なので助かりました。少なくとも昼間は非常に安全であると感じ、交通手段・安全の面から見て、お勧めできる観光・見学の都市であると思います。

ワシントンDCでは、今年の6月に橋先生の誘いで千里中央の豆腐料理店で会食したNational Science FoundationのLiu博士に自宅でのパーティに招待され、楽しい時間を過ごしました。このパーティに参加のLiu博士の友人達は台湾の出身者で1960年代にU.C.Berkelyで学んだ仲間で、1人は鉄道の研究所に勤め、もう一人はVOAのディレクターで、それぞれアメリカで生活の基盤を築いているようでした。そのころアメリカの大学に留学したり、先生でいた日本人の人たちは日本に地盤があることで、アメリカに残った人は少ないように思います。このようなことを見ますと、自国が良いことは有難い事ですが、逞しさに欠けるように思います。

Liu博士の家に行くのに地下鉄を利用しましたが、途中の駅で皆が下車してしまうので、何事かと思っていたところ、インド風の女性が、日本語でこの電車はここどまりなので次の電車に乗るように教えられました、その人は15年ほど前に京都で日本語の勉強をしたとのことで、非常に懐かしがっておられました。この人とは電話もしくはeMailで連絡できるようになりました。

また、帰路のホノルルでは、ホテルのマネジャー主催のカクテルパーティに招待され、偶然、同席したフロリダのほぼ同年の夫婦と話が弾みましたが、この人達ともeMail Addressを交換しました。

今も新しいeMailが入ったようです、いずれにしてもeMailとうまく付き合わないとならないようです。

21世紀の水

三 峰 山 郡 教授

名譽教授 村岡 浩爾

21世紀に予想される大きな水問題として、ある人が次の二点をあげた。一つは、20世紀は石油争奪で世界戦争が起ったが21世紀は水戦争だろう。二つ目は、地球環境保全に向けて日本は循環型社会形成推進の法律(関連7法)を整備したが、水問題もそれを通してのみある、というものである。

消えゆくアラル海、上流他国が開発されるナイル川、下流域干ばつの黄河、いずれも人口激増に対応する水資源開発のなせる結果である。国際河川が当然の大陸大河川は全て水危機にさらされ、戦争の勃発が予想される。そのなかにあってライン川やドナウ川は過去に幾多の経緯があって今日の先進的な水管理制度を築いているので、これには学ぶところ大である。また日本には国際河川というものがなく、一見苦労がないようだが、国際社会の中で何らかの責務を果たさねばならない日本としてはこのような水に無関心であってはいけない。とすれば、日本は何をしなければならないのか。

循環型社会といえばすぐに気になるのがごみの問題である。もう数年も経てば産業廃棄物の最終埋立場がないと言う大都市圏で、資源の3R(Reduce, Reuse, Recycle)運動の考え方方が徐々に芽生えつつ合って、家庭でも電化製品やペットボトルなどの回収、果ては生ごみの再資源化まで検討されているのは心強い。しかし現実の社会では資源やエネルギーを極力節減し、精神的な豊かさを追求しようと言う行動提案を実行するには、我が身を振り返ってみてもまだまだ悠長なものがある。

ところで循環型社会にあって水についてはどう対処すべきなのか。少なくとも、石油と違って水は循環可能な資源である。そこをついた「健全な水循環」を作ろうという目標はわかる。循環するが故に水を大量に、そして汚して使うことはいけないことだということもわかる。しかしづかっている人に対しては話は早いが、何も意識しないで生きている人たちに指導や啓蒙だけで循環の重要性や必要性を体得してもらうことはきわめて困難である。従って誰もが知らず知らずのうちに水を適切に使い、豊かな水文化を築いて行けるような社会制度をいうものはないのだろうか、と考えるのである。

一つには環境税と言うべきものの適用がある。社会に係わるすべての主体がそれぞれ公平に責務を負うことが原則であるから、水の使用量や汚濁させた量に応じた料金制度を敷くこともある。水道料金、下水道料金がそれである。しかしこれには水循環の概念が強力には入っていない。水の涵養源である川の上流域、すなわち森林域まで遡り、健全な森林があつてこそ豊かな海の恵みを享受できるという流域の一貫性の概念をどう組み入れるかが課題である。更に先に述べた通り、世界には日本があざかり知らぬ水問題が起りつつある。しかしこれもいずれ地球環境の問題として我々の子孫に跳ね返ってくる問題である。ということは、国際協力の名の下でどのような社会制度を当てるかも重要な課題である。

もう一つには人間の原体験の問題がある。環境とは生まれたときからのおつき合いだから、水についても人には種々の体験があつてしかるべきである。その中で21世紀に引き継ぐ体験とは何だろうか。大人になって概念としての水問題を学ぶことからその重要性を認識する人もいるにはいるが、数の上では無認識の人の方が圧倒的に多い。従って多少時間がかかるても体系的な環境教育の普及を確立し、原体験を豊富にすることが必要だろう。「自然の恵み」「ゆとりと心豊かな生活」「いやしの場」などという言葉を、実体にかえて誰もが振る舞えるような人の集まりであつてほしい。

水に関して何か役に立つことができないだろうか、と考えるこの頃である。

21世紀、都市空間の有効活用について

(80) 田中昌

滝田 裕久 (C65)

21世紀になると都市、特に大都市にはどんな変化が起こるのだろうか。わが国の都市は、20世紀の後半、急速に成長した。その結果、通勤地獄、交通渋滞、環境悪化など都市問題といわれる多くの問題を抱えるに至った。では、大都市を再生するにはどのような方策が必要だろうか。それは都市空間を有効に活用することである。

都市部における限られた空間を利用していく為には、地上はできるだけ人間活動の空間として開放し、生活を支える都市インフラ施設は地下、特に、これまで活用されていない大深度地下に整備する必要がある。地下空間の高度利用の技術はすでに存在しており、現実に大都市においては大深度地下が利用されている。例えば、地下鉄では、営団地下鉄(東京)南北線は地下43mを通り、東京神田川地下調節池は地下40mの所に設けられている。また、超高压地中送電線では、関西電力西梅田付近管路は土被り66mである。

しかし、これらの地下施設はいずれも従来通り公道の下を利用しておらず、ルート的に無理をしている所もある。私有地の下も自由に利用できれば、ルート選定も楽になり、経済性も確保でき、大深度地下の活用が推進される。これを可能にするのが、今年5月に成立した大深度地下利用法である。

大深度地下は、土地所有権が及んでいないとはいえないが土地所有者等によって通常は利用されない空間であり、公益性を有する事業による利用を土地所有権に優先させても、私有財産を侵害する程度が低い空間である。従って公共性のある事業は民有地地下であっても大深度ならば自由に利用できるというのが大深度地下利用法の骨子である。また、具体的には、地下40mから下の空間、あるいは基礎を設置する支持層と呼ばれる固い地層の位置が深い場合には支持層上面から10m以下の空間が大深度地下と考えられている。

大深度地下利用法を適用できるのは、鉄道、道路、河川、電気、ガス、通信、水道等の公共性のある事業であり、全ての都市インフラ施設を含んでいる。大深度地下に、地下物流ネットワークとして地下道路網を整備し、電気を動力とする専用トラックで都市内輸送を行えば、自動車の排ガス問題は解決でき、交通渋滞の緩和も可能である。又、地下共同溝を使ってゴミを真空輸送するシステムを導入すれば、ゴミが山のように積まれ美観を損ねている繁華街が美しい町によみがえる。

また、地下道路網へのITS(高度道路交通システム)を導入すれば、交通渋滞のない道路の誕生、さらには、車に乗っているだけで地下道路網を通り、自動的に目的地まで走ってくれるといった夢のような時代の到来も近い。

大深度地下利用に関しては何年も前からその可能性について議論され、深い所の施工技術も進歩しており、実現の入口に差し掛かったといえる。21世紀初頭には大深度地下利用が実現し、限りある地上の空間が緑地などに開放され、都市環境が向上し、生活にゆとりと潤いのある都市が実現されると確信している。

21世紀の都市について思うこと

(65) 山田 哲

山田 哲司 (C65)

1967年に大阪を離れて以来アメリカに住んでいます。コロラド、ニュージャージー、イリノイ、ニューメキシコ州と米国の山岳部—東海岸—南西部を5-10年に1回の割で住所を変えました。移転は転職によるもので、好みの都市に移動したというより、新しい職場がその地にあったためと言えます。定年を何年か先に迎えるようになって初めて好みで生活の場所の選択を考えるようになりました。

第1の選択はアメリカに住むのか、日本に住むのかということです。日本には25年間住みましたが、アメリカには33年住んでおり、子供が2人、孫が2人、アメリカにいますので、ファミリーという観点からはアメリカに分があります。しかし生まれ育った日本にはもちろん忘れ難いものがあります。住の環境のいいアメリカ、食の豊富な日本と甲乙つけ難いのが現状です。健康な間は日米間を往来できますがいずれはどちらかを選ばねばなりません。

選択の第1の基準は安全性です。昔、日本は安全、アメリカは危険と言われていたのですが、今は必ずしもそうとは言えなくなりました。第2は医療施設の発達していることでしょうか。日本で介護の問題が毎日のように新聞、テレビ、書籍で取り上げられているのは、その関心の深さとともに設備の不備にも関係しているのでしょうか。他にも交通の便、環境の良さ、文化施設の充実と数え上げればきりがありませんが、必ずしも必要条件ではありません。

21世紀の都市のいくつかには生活に望ましい条件の大半が満たされているように思えますが、人口集中のあまり、環境、公害、騒音等の観点からみると逆に住みにくくなっている面もあります。経済発展のための開発と自然環境の保護とは相反する関係にあるのでしょうか。戦後日本は未曾有の経済発展に支えられ、その反面自然破壊、少数派意見の無視が普通に行われてきましたが、バブル崩壊に伴い、あるゆる面での見直しが要求されています。

原子力発電所の新設、空港の拡張には住民が反対し、計画の変更、破棄をせざるを得ない状況にあります。ごみ焼却場建設等、生活に不可欠な施設への反対も強く、文明社会を維持できなくなるような事態も起こっています。

ここにきて水資源の限界、大気の限界等日本人にはあまりなじみのない障壁に突き当たってしまいました。エネルギー資源の限界は昔から経験していましたが、輸入に頼ってある程度解決してきました。水資源、大気の汚染は輸入で解決できる問題ではありません。自然の自浄能力を超えない範囲での開発に限定するしか他に方法はありません。汚染と自然浄化能力のバランスを保つというところに学問の果たす役割、大学の果たす役割が期待されているように思います。

幸いに情報技術(Information Technology)の発達で、どこにいても同じ情報を得ることができます。ということは一ヶ所に集中しなくともいい時代になっているということです。団体活動、チームワークをモットーに生活してきた日本人に少数派意見の尊重、個人主義の尊重は難しい課題かも知れません。都庁の地方移転等、思い切った計画も打ち出されていますが、現状維持の風潮も一向に変わるものではありません。頭で理解、納得していることと、実行との差が余りにも大き過ぎます。21世紀の都市について考えるとき、今までにない発想、あるいは既にある計画を実行に移すことが、国、自治体、会社、個人に求められているような気がします。

デジタル・アーバンデザイン—ネット社会のまちづくりイメージ

(87A) 好 庸 隆

三 好 庸 隆 (A72)

環境共生型社会実現にむけての議論が盛んです。

環境共生概念へのアプローチの仕方としては、①エコロジカルアプローチ、②技術・技法的なアプローチ、③保全・再生的なアプローチ、④社会・文化的なアプローチなど、多様なアプローチが考えられています(例えば「サスティナブルアーキテクチュア」ビオシティ参照)。都市デザイン領域においても、多くの事例・試みが報告されつつありますが、そのような中で、環境共生型社会を創り出そうとする人々(社会)の意思をいかにして創り出していくか、という視点からの試み・発想が意外に欠落しているのではないか、と筆者は危惧しています。

例えば、技術的には解決している課題であったとしても、人々(社会)の関心が薄ければ、その技術の普及は遅れる訳で、環境共生型社会の実現はその分遅れるわけです(環境教育の問題)。

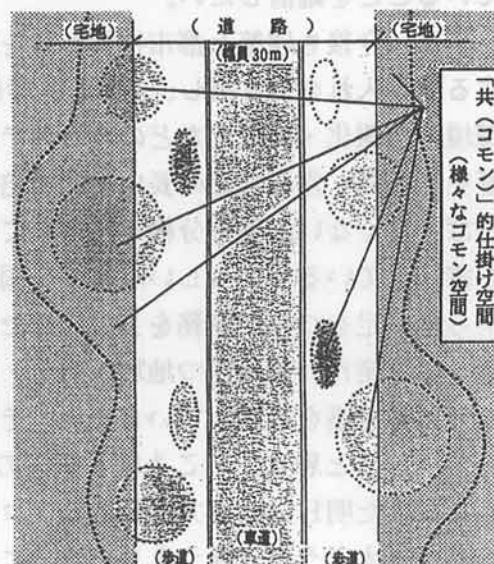
また、税制や、土地・建物の評価面において、環境共生型社会、サステイナブルな社会を創り出す状況が確立しているとは、とても思えません(税制・不動産評価の問題)。

さらに、例えば、緑豊かで、デザイン性の高いパブリックスペースを計画・設計したとして、それが地方自治体に移管されたとき、多くの地方自治体において財政事情の悪化が予想されることから、当初の計画・設計が維持できない、即ちサステイナブルでない状況が十分予測されます(地方財政の問題)。

さて、環境共生型社会を考える際、その前提となる21世紀前半の日本社会は、人口減少社会・高齢社会・(インターネットの普及を背景とした)市民ネットワーク型社会・参加型まちづくり社会などのキータームで把握することができるでしょう。これらをおむね必然としたうえで、前項で強調した3つの視点をもからませつつ、冒頭に示した多様なアプローチの成果を各論で生かし、環境共生型社会実現にむけて総合的・戦略的に取り組む必要があります。

都市デザイン領域で私が最近提案した例として、Sニュータウン主要街路における試みについて報告します。提案の骨子は、総幅員30m道路で片側7~9.5mの歩道空間において、共(コモン)の仕掛け—例えば、ガーデニング・クラブによる花と緑の育成・管理といった、住民参加システム—を導入し、公的に仕上げられた画一的道路景観を目指すのではなく、住民で育んでいく“庭園的街路環境づくり”をめざす。一方、沿道宅地側では、土地条件に対応しつつ、私の空間に、共(コモン)の仕掛け—例えば、オープン外構、街路から楽しめる花壇、窓辺の花、歩行者のネットワークなど—を導入する、というものです。

このような共(コモン)の仕掛けを豊かにすることにより、次世代型のコミュニティ形成を育む可能性を内包させるとともに、道路維持費の低減を図ります。一方で、デジタル技術を駆使しつつ、あるルールのもとでの市民参画方式を開発し、都市デザインの多様化を図ります。市民ネットワーク型社会、参加型まちづくり社会を背景に、このような仕組みは、益々現実味をおびる状況が来ています。そこにネット社会における環境共生型社会実現にむけての“デジタル・アーバンデザイン”的可能性と魅力を感じている、この頃です。



Sニュータウン主要街路コンセプトパターン

住民が誇りを持てるまちづくり

(STA) 第 3 部

渡辺 豪秀 (A78)

卒業してはや20年、組織事務所で建築の設計・監理をずっとやってきた。その間、大規模多目的イベントホール、小事務所から大規模オフィスビル、保健福祉施設、町役場、学校、ギャラリー、そしてリニューアルなどに関わった。どれも、自分として大学で学び、その時に感じていた「建築と都市との関わり」を意識した設計アプローチをしてきた。それらのプロジェクトをあらためて振りかえってみて、特に公共的空間を提案し、実現できたことは成果であった。ここ数年は、京阪神の大都市より、地方の比較的小さな市町村での仕事をする機会が増えてきて、それらのまちを訪れ、大阪の都市事情との差異を身を持って感じている。それらの地方都市は、約10年前のいわゆるバブルの影響はなく、それぞれのまちとして、それこそ背丈に合ったゆっくりした歩みをしている。今の高度情報化時代の中で、ただひたすら走りつづける大都市とはおよそ異なる人間的なまちがそこにはまだある。それは、昔は大阪にもあった隣近所が助け合い、皆が顔見知りの小さなコミュニティーがまだ健全に存在しているからであり、まちの首長の顔をみんなが知り、自治体と住民が一体的な生活をしていることからでもある。それらのまちの市長や町長さんと話す機会も多く、皆さん一生懸命にまちや住民のことを真剣に考えておられ、大都市での価値観にどっぷり漬かっている自分にとって目を覚まされことが多い。

さて、「激動の」といえる20世紀も終わり、21世紀を迎える今、20世紀の評価をした場合、今の大都市における人々のつながりの希薄さや政治、行政に対する不信感などで、未来に希望が見出せない人々が増えていることにこそ、その歩んだ足取りに反省をすべきものではないかと思う。21世紀はその反省に立ち、良い時代を迎えたいと思う。温故知新ではないが、つい30年前にはあったはずのまちでの人々の生き生きとした営みと相互扶助の精神を取り戻さねばならない。それは、あの阪神淡路大震災において、多くのボランティアがこぞって活動し、それが社会的なうねりをつくりだし、今のNPO活動に継承された事実からも見ても国民の心の底には生き長らえていることを確信したい。

私は、今後も建築と都市に関わりを持ち、その空間形成に携わるものとして、人々のまちに対する思い入れを引き出し、それを、形に具現化していく者として、その大きな責務を感じている。環境・情報化・国際化などの今日のテーマは避けては通れないとは言え、根源的な、自然・町・歴史・人間・営みなどの長い時間で培われたものにはかなわない。東京一極集中の日本社会はやっぱり良くない。地方分権が叫ばれても、変わらないのが現実だ。独自の地方文化と人々の営みを継続しているすばらしい町村は全国にいっぱいある。時代の速い流れに流されないようにこれから地に足をつけて職務をしていきたいと思う。うれしいことにどれほど工業化が進んでも建築は一品生産だ。その建つ地域・風土・気候・人情の個性を生かした独自のものとして人々を幸せにできる建築を目指していきたい。その積み重ねを行うことで、それぞれのまちの環境が創り出していけると思う。どこも同じ駅前の風景ではない住民が誇りを持てるまちのイメージとして。さあ、また明日は、西方へ新幹線、ローカル線を乗り継ぎ、地方のまちに出張だ。何か、大阪から逃げ出すようにうきうきした気分になるはどうしてだろうか。どうやら、21世紀の都市を考えるヒントは東京や大阪ではなく田舎にあるのかも知れない。

まちをつくるということ

(020) 田 部

田 村 恵 美 (A96)

21世紀……。と言ってももう来年ですが、これまでの100年とこれからの100年、世の中はきっと随分かわるんでしょう。20と21、うりやっと跨ぐ一人として、「都市」よりももう少し身近な感じに、「まち」は一体どうなるのかなあと考えてみました。

～これからまちはどうなるのかなあ？　これからどうなってほしいかなあ？～

ただいま私は大阪から神戸へ通勤しています。毎朝電車に揺られながら、東から西へ神戸のまちを眺めています。神戸へ就職した理由はずばり「震災復興のお手伝いをしたい！」ところが私が就職した頃には既に復興事業は一段落していました。その完成を横で見ながら「なんで就職したんやったっけ？」とも思いつつ、神戸のまちを眺め2年が過ぎ、最近「なんかおかしい？」つて思っています。

震災から5年を経て、神戸のまちはすごくきれいになりました。あちこちに新築の建物がたくさん見られます。でも私には電車からの風景が、東から西どこへ行っても同じに見えるのです。そして少しだけ殺風景に映ります。東に市街地、西は下町、真ん中に都心、北は田園、海と山に囲まれたまち、神戸ってそんな感じだとよく耳にしますが、少し状況は変わってきているようだ……。

私は大阪の住商工が混在する下町で生まれ育ちました。周りにあったのは海や山ではなく、路地裏の長屋や町工場の廃材の山、それに臭い臭いドブ川など。なんてごちゃごちゃしたとこやと子供ながらに感じていました。そんなどからか、今の神戸を見ると本当にきれいで羨ましくも思う反面、少しだけさみしく感じます。他のまちと比べても意味はないけど、その「まちらしさ」が見えにくくなっているような。きれいになって便利になって、それはとてもよいことだけだ……。

でもこういうのって他でも見られませんか？　私が育ったまちだって変わりました。どこもきれいになっていくのだけど、そのまちらしさって少しずつ失われてではないでしょうか？

震災の後、神戸のまちを1日でも早く復興するために、たくさん的人が協力し合い、必死で再建されました。そしてその大変さをいろんな方から聞いてきました。震災前と震災後、まちが随分変わったのも当たり前。でも「まちをつくること」にとって本当に大事なのはきっとこれからなのだと思うのです。

これまでの「まちづくり」は行政主導で進められてきて、できるものと言えばどれも平均的。それに「不便」は悪いことで、「便利さ、効率性」を追求し、作業はすべて分担性。でも今状況は変わっています。例えば、まちに住む人、建物を利用する人が積極的に、勉強熱心になってきています。自分の住むまちに注目してきている。「いつのまにかできるわ」ではなく、「どんな作るの？」「いっしょに作ろう！」「こんな作りたいから協力して！」って。

変わったのは人だけではなく、建設業界にも新しい動きが見られます。どんどん新しいものを作ってきた「スクラップ＆ビルトの時代」から、今あるものを大切に活用していく「ストック＆リノベーションの時代」へ。これまでには少し安易にものを作り過ぎたのかもしれません。

最初の問い合わせに戻って、これからどんなまちになってほしいか？

例えばまちの中にたくさんある貴重な財産がどんな風にならいいのかを皆で一緒に考え、住み手、利用する側が今よりももっと主体となって、今よりももっとじっくり作られていく。例えば、一人一人の思いがまちにぴょこぴょこ現れている。それからかわっていくことを許容できる余裕がある。そして最後に「こんなまち、他にないよなあ」というくらい、それぞれの個性が溢れている、そんな感じがいいなあと思います。「まちをつくる」のはそこに住む(いる)人で、「まち」はどんどんかわっていくものだと。付け加えて言うならば、そこに私も参加できればなあ、と。

思いつくままに書き連ねました。諸先輩方のお叱りを受けそうな所もありますが、「アホやなあ」と笑っていただければ……。

卒業50年を迎えて

(82A) 美 恵 伸 明

池 田 功 (C50)

50年を経ても思い出は山の様にある。いつもすきっ腹をかかえていた。新婚早々の伊藤先生の仮住いへ押しかけてご馳走になつたりして今も顔の赤らむ思いをしている。1本のタバコを回しのみしたり、思い思いのボロ服を着ていた。中には父上の将校用軍服を着ていた仲間もいた。就職の面接には尤もらしい服を貸し借りして行った。そのような学生生活だっただけにお互いに深い友情で結ばれ今も続いている。

同窓の先輩がいない卒業生は苦労も多かったがお互いに励まし合い、友人の消息を吾がことのように憂い喜んだものだ。

関東に住む同窓生の増加につれ構築会東京支部が発足した頃、旧友たちと構築ゴルフ会を催すようになった。既に40回を超える後輩も加わり3~5組で毎回楽しい会が続いている。ゴルフも楽しいが19ホールでのワイワイが何よりも楽しい。その賑やかさは帰りのクラブバスの中まで続く。第1回卒の原田、笹倉、西田、池田はいつも一緒であったが、悲しいことに西田君が今年3月に急逝された。ゴルフ仲間を含め多勢の同窓諸君と共にお送りできたのがせめてもの慰めである。

4人で合計300才が近いと喜んでいたが、残りの3人で250才を目指にしようと言ったら、後輩達は300才にしろと励ましてくれている。林の中から西田君の励ましの声が聞こえるような気がする。

4人で合計300才が近いと喜んでいたが、残りの3人で250才を目指にしようと言ったら、後輩達は300才にしろと励ましてくれている。林の中から西田君の励ましの声が聞こえるような気がする。

4人で合計300才が近いと喜んでいたが、残りの3人で250才を目指にしようと言ったら、後輩達は300才にしろと励ましてくれている。林の中から西田君の励ましの声が聞こえるような気がする。

五十年を迎えて

(023) 池田 勝

笹倉 光雄 (C50)

今年3月19日西田芳弘君がなくなった。西田君は自己紹介で趣味は金魚といって驚かせた。昭和22年夏休み実習に二人で国鉄姫路工事事務所に行って河川測量をした。拙宅に飼猫を連れて来たりよく遊びに来た。

彼の家でかるた取りに招かれたこともあった。

彼は積極的な行動派で卓球・ダンスも上手だった。彼の父は三和銀行の営繕部の建築家で、建築を専攻し清水建設に就職した。その後住友金属に転職し、SMエンジニアリング社長を歴任した。

池田功君と三人でゴルフをしたのが始まりで構築ゴルフ会が始まり現在44回を数えている。原田修君と四人でラウンドするのが最高の楽しみだった。にぎやかなのが大好きでいつも笑いをわすれずになといいながら自らまわりに笑いを作りながら楽しく人の輪を大事にしていた暖かい笑顔を忘れられない。晩年は風景写真と園芸を趣味に余生を楽しんでいた。お互いに建築と土木と進んだ道は違ったが、西田君とは正に水魚の交わりでした。

本当に寂しくなりました。

卒業50年を迎えて

(C50) 西田 修

原 田 修 (C50)

昭和25年、構築工学科の卒業生は16名であった。この少数の仲間はそれぞれに活力があり、仲のよい同級生であった。

学科創設に当つての先生方の熱心な御教育と、それにもまして本当に温情あふれる御薰陶が50年後の今も沁々と思ひ出される。

学生達は新設且つ少数のひけ目をハネ返すべく、「構築、ここに在り」と云わんばかりの意気ごみで、胸を張り、肩肘を張つて学内を闊歩していたように思ひ出される。

良き師良き友を持つことの出来たまことに幸せな3年間であった。

50年後の今日、わが構築の卒業生は毎年100名に及び、各界で重きをなし、阪大の名声を高めしめている。喜ばしい限りであり、創設時代の先生方を始め、継承された教室の皆様方の御努力の賜として深く敬意を表したい。

同級生はすでに古稀を超えたが残念乍ら半数近くが他界された。当時の懐かしい笑顔を思い出し御冥福を祈り乍ら、構築グループのますますの発展を祈りたい。

公共事業・建設業バッシングが日常となったこの頃であるが、建設産業の活力の目標を見出す努力をしたいと思う。

環境、高齢化対策や、或は農業の活性化等夢を模索したいものである。

東京にいる同級生は今年早春西田君の急逝により3名となった。3人はまずまず元氣で悠々自適……いや有友爺的という所か。

3人の間から反論あり、優友と云うべしと。

卒業40年をむかえて

(66) 旗山 慶

小川 裕章 (C60)

1. 40年間の経済社会の移り変わり

私たちの年次が社会人となったのは池田内閣の所得倍増計画が策定された年であった。以後日本経済は高度成長の波に乗り、各種の中長期計画が次々と目標を達成して繰り上げ改訂された。我々構築の分野でも高速道路、新幹線、港湾施設と臨海工業地区等、大規模なインフラ整備にくわえて、人口の急激な都市集中に対応するための都市施設整備や住宅宅地の開発が推進され、経済成長の基盤が形成された。

途中でオイルショックの試練にも会ったがそれも乗り越え、わが国は世界も注目する成長を続けた結果ついに世界第二の経済大国になった。

しかしながら昭和61年頃からのバブル現象の発生と平成元年末の崩壊によってわが国はそれまでとは一変し今日に至る長期の昏迷期に陥ることとなったところである。

2. ふりかえってみれば、ラッキーな世代

こうして私達の世代は日本経済の拡大・発展期とバブル崩壊後の混乱・停滞期の両方を経験してきたが、これまでの40年をふりかえってみると、総じて言えば私たちは非常に多忙な人生ではあったがそのかわりラッキーな世代であったと言えるのではなかろうか。

つまり、拡大する経済のもとで、建設産業をはじめ産業の各分野において毎年増大するパイを各企業が仲良く分け合う、日本の仲良し企業社会が形成されてきた。もちろん競争がなかったわけではないが、食うか食われるかといったきびしさはあまりなかった。会社の倒産、リストラ等を心配することなく仕事にうちこめた。

しかしながら、近年わが国の経済はバブル崩壊の後遺症から立ち直れず、長期低迷に陥った。地価の下落傾向が止まらず消費の落ち込みも回復しない結果、銀行、ゼネコン、生保、百貨店、といった一流大企業が破綻、倒産するといった、以前では考えられなかったような事態が生じている。しかも人口増加が止まり、生産年齢人口は減少傾向に入った。

大都市への人口集中もストップし、都市計画の役割もかつての「都市成長の適切な誘導と無秩序な開発のコントロール」といった役割から「都市機能の更新、地方都市の中心市街地の活性化、環境・エネルギー対策」といった役割にシフトした。

3. 仲良しクラブから厳しい競争社会へ

もはやパイは大きくならない時代になった。大きくならないパイをめぐって生存をかけた厳しい競争をしなければならなくなってしまった。IT化やビジネスルールの国際化もあいまって企業内組織や雇用関係も変化し、サラリーマン人生も決して安泰なものではなくなってしまった。おおげさにいえば、私達の世代が住んでいた世界とは別の世界が展開しようとしているのである。そこで、新しい秩序では旧来の日本のビジネス文化はもはや通用しない。仲良しクラブの時代は終わったのである。

これから働き盛りをむかえる若い世代のみなさん、ご苦労様です。私達の年代よりはるかに大きな努力と知恵・想像力で新しい世界を切り開いてください。

卒業40年を迎えて

(5) 章 番 田 小

麁 山 進 (A60)

私たち1960年(昭和35年)に構築工学科を卒業した者は土木17名、建築20名。そのうち土木・建築ともそれぞれ2名が残念なことに他界されている。生年でいうと昭和11~13年で、終戦のときは小学校の低学年であった。戦争の悲惨さを理解できた最後の年代で、粗食で飢えをしのいだにしては、よくここまで生きてきたものだと思う。

枚方市御殿山と京橋の東野田学舎はこれが国立大学の教室かと最初は愕然としたのも今はいい思い出だ。建築設計の授業に講師として来てくださっていた故東畑謙三氏が、欠席者の多い日、「私は、給料をもらうためにここへ来ているのではない。次世代を担う優秀な人材を育成するためなのだ。」と嘆かれたのがつい昨日のようだ。卒論など、今の学生はパソコンを駆使しているが、電卓、新幹線、カラーテレビなど、一切無い時代であった。

卒業の昭和35年は首相に池田勇人氏が就任、わが国の高度経済成長が始まった時期である。レジャーという言葉がちらほらしてきた時代で、初任給は1万4千円、国民総生産が14兆円、1ドル360円の固定相場制で、わが国の給与水準はその後しばらく毎年十数%も上昇を続けることとなる。土地の価格と銀行の貸し付けはそれぞれ5年前の3倍となり、つれて株価が上昇、特に土地はその後も毎年異常な上昇を続け、これがわが国の経済成長率を世界一とした牽引車ではあったが、ドイツのような土地騰貴を抑制させる施策も政府はとることをせず、土地の担保力の上昇につれて銀行は企業に不相応な融資をした。多くの有識者も日本経済は無限に発展するという錯覚にとらわれていたと思われるが、当時、私は経済学者ではないが「無配に近い会社の株価がなぜ1000円もするのか、これはおかしい」と思っていた。案の定こういった不適切な循環が現在多くの破綻となっているのである。

この10月、一泊での「卒業40周年記念同窓会」を持った。体調のすぐれない者とやむをえない所用がある者を除く25名が参加した。恩師をお呼びしてはとも考えたが、建築はすべての先生が故人となられており、土木のお元気な先生方にはまたの機会に譲ることとした。一日目は富士山の西側半分を観光バスで巡った。朝霧高原、5合目、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖、白糸の滝などを天候に恵まれて観光、その夜は久しぶりの再会に遅くまで飲み、語り合った。二日目は有志のゴルフで、18名がプレーを楽しんだ。生まれてはじめてのイーグルを出した者、肩を壊していく一年ぶりにクラブを握った者、久しぶりにグロス79をマークした者など、すばらしいゴルフ会となった。

参加者から聞かされた近況報告と事前にとっていた欠席者のコメントから、何らかの形で過去または現在体調を崩したもののが半数にものぼっており、健康がいかに重要かが改めて認識された。また、自分の会社だからと頑張っている者、再就職して仕事をもっている者が半分強、あの半数近くはリタイアして、人生を楽しんでいることが分かった。

男性の平均寿命が80歳として元気な間はあとわずか10年ほどである。退職したら趣味がなく時間を持て余す、おかあちゃんから邪魔にされるといった話があるが、やはり趣味というものを持たねばなるまい。ゴルフだけが趣味、はいけない。昼夜、屋内外を問わずに出来る趣味。それも読書、観劇といったパッシブなものより、自分の頭脳、手足、身体を使ったアクティブなものが必要である。今の日本のシステムでは厚生年金で生活は出来よう。段階的に支給開始年齢が65歳となるが、よくいってもそれくらいで勤労の終わりにしてはどうか。子供のころから大学までは勉強、社会に入ったら仕事や妻子のために頑張ってきたのだから。ただ、会社のオーナーや自営されている方は難しいかもしれない。ゆとりと豊かさを実感することが人生ではなかろうか。記念同窓会から得た総論である。

卒業30年を振り返って

(07A) 二 次 本

田 端 竹千穂 (C70)

阿部先生より、卒業30年を記念して、構築会だよりに何か書くようにと言われ、同期生では、もっと文章の上手い人がいるとお断りしたが、お前数少ない公務員だ、適任だと言われ(なぜ公務員が適任か不明であるが)、仕方なく拙文を書くことになりました。

卒業30年と云うことで、この30年間を振り返ってみたいとおもいます。

大学に入学した昭和40年代初めから、今までの時代は、常に激動の時代であった気がする。この間、我が国の経済は大いに発展した。学生時代の昭和40年前半に、年平均11.6%もの成長率を達成した我が国経済は、それ以降のニクソンショック、第一次、第二次オイルショック、円高等の経済困難を乗り越え、平成に入ってその絶頂期を迎えた。バブルがはじけこの10年間は経済の再生に非常に苦労しているものの、世界第2位の経済大国としての地位は揺るぎ無いものになっている。

一方、海外に目を向けると、東西冷戦の大きな変化がある。ベトナム戦争でアメリカが関与を深め結果的に敗北、中国の文化大革命、ソ連のプラハ侵攻、アフガン侵攻等東西冷戦が厳しくなっていったが、米中国交回復、中国の開放政策、ソ連のペレストロイカに続く、その崩壊、東西ドイツの統一、東西対立の終焉と、思いもしなかった方向への世界情勢の変化であった。

この間、私の仕事であるが、転勤の連続であった。まず新潟に就職したが、次ぎは東京、それから横須賀、高知、神戸、ジャカルタ、横浜、宇野、バンコック、名古屋、新潟、泉佐野、東京と勤務地にして12箇所、引越しは、同じ場所での宿舎の移動もあり、21回にも及んでいる。転勤が大変なように思えるかもしれないが、馴れてしまうと、逆に、3年も同じ場所にいると退屈してくる。また、仮に嫌な上司がいても1年から1年半程度我慢すればどちらかが出て行くので上下関係も気楽であった。この間、運輸省港湾局だけでなく、港湾技術研究所、他省庁や海外、財団や特殊会社(関西空港)等色々な機関で勤務し、港湾の整備はもとより、橋梁、沈埋トンネルの整備、漁港整備、関西空港という大プロジェクトや海外技術協力と多くの貴重な経験をさせてもらった。ころころ仕事を変わるたびに、日本経済の伸びに伴い公共事業予算も伸び、行けば行くどんどんの時代であったと思う。忙しいが面白い仕事であった。

この転勤の間に、仕事で指導され、お世話になるとともに、一緒に飲み、遊びながら(仕事よりこの方に重点があった気がする)、多数の人と知り合えたのが私の財産と思っている。お陰様で、年賀状の枚数が増えづけ、今は、失礼と思いつつも500枚程度に押さえている。また、ゴルフも何とかお付き合いできるようになったと思っている。

これから21世紀、世界経済は、IT化の進展で、生産、商取引、物流等大きく変わり、真のグローバル化へ向います。日本経済もITのおかげでやっと上向いてきた感があり、もう一息と云う所に来ている。しかしながら、この世紀末、世界人口増加、食糧問題、エネルギー問題、環境問題と20世紀文明の負の部分が顕在化し始めてきている。このため、21世紀は、これらに対応するための知恵の時代だと思っている。

私は、この6月末で28年3ヶ月勤めた運輸省を退職し、(財)国際臨海開発研究センターに就職しました。ここは、主として、港湾分野の国際協力案件の開発調査を行う機関です。奇しくも学部卒業30年が、人生の一区切りになりましたが、新たな若い気持ち(実際その気でいる)で再チャレンジし、知恵を出し21世紀でもう一頑張りと思っています。

皆様も、知恵の時代、21世紀において、ますます発展されることを念じて、私の筆を折ります。

卒業後30年

(070) 鮎川 謙一

木林長仁 (A70)

1970年の卒業から20世紀最後の年を迎えるようになり、東野田キャンパスの下町的な雰囲気が懐かしく思い起こされるとともに、またその年に千里キャンパスに移転して、大阪万博の開催もあって華やかな賑わいの中で、真新らしい校舎の打放しコンクリートの匂いを嗅ぎつつ卒業したことを、昨日のことのように感じております。

私は、さらに2年間を千里で過ごし、それから建設会社に入社して、大阪の設計部で構造設計に携わることになりました。時代的に楽しい仕事を担当する機会に恵まれ、設計業務の傍らにソフト開発も行いつつ、個人住宅から超高層建築・ドーム建築あるいは原子力発電所建屋など、幅広いバリエーションに対応し、それなりの自負心を持って設計に臨んでおりました。

しかしながら、先般の阪神・淡路大震災は、構造エンジニアとして非常に大きなショックを受けました。地震に対する怖さは抽象的には理解していたつもりでしたが、実際自分の設計した建物がそのような大地震を受けてみると、改めて自然の力の凄まじさの前に自分の非力を痛感させられました。私が生まれた1948年は福井地震の年であり、母の話によると震源地に比較的近い町で行水を浴びていたそうで、記憶は全く残っていないのですが、地震揺れに対する恐怖感はどこかに残っていると感じております。それから47年後に、自分の設計した建物がこのような大震災を現実に受けけるとは想像していませんでした。個人的には、設計した建物は幸い大被害にまで到らず、一応責任は果たせたのではないかと思っていますが、数多くの建物が想定以上の被害を受けたのは周知のとおりであります。破壊原因の究明も精力的に行われておますが、過大なレベルの地震に対して、どのようなレベルの構造体損傷をイメージして構造計画を行うか、また社会に対してどのように説明するかが、設計者として問われていることを実感しました。

2年前からは、会社の業務都合で東京に転勤して免震や制振分野の業務を担当することになり、大地震に対する一つの現実的対処法を行っております。やはり、関東の地震遭遇危険度はかなり高いのではないかと思っており、個人的にも本年中に免震マンションに転居することにしております。構造設計者でも免震建物に住んでいる方は稀ではないでしょうか。それで他人に免震建築を勧めても説得力がないのは明らかで、身をもって実践したいと思います。

その一方で、我国古来の伝統木造建築に接する機会にも恵まれ、平城宮朱雀門の復原建設や唐招提寺金堂の解体修理工事のお手伝いをさせてもらっております。この分野は、大学の研究室も極めて限られており、構造エンジニアが設計に携わる機会が殆どなかった分野です。

現時点の最新の技術をもってしても解明されていない事象が多く、それだけに固有の文化財を後世に継承するためにも、構造エンジニアリング力が最も必要とされているところであり、阪神・淡路大震災でも深刻な被害を受けていることから、精力的に研究を進めなければならないを感じております。しかしながら、一般建築の耐震補強と同様に対処していたのでは、文化財としての美的価値を損なってしまうため、最大限の技術力で最小限の補強に留め、なおかつ歴史意匠と折り合いをつけて共同作業をしなければなりません。現時点での解決策が、後世にどのように判断されるか厳しく問われる設計です。ハードルは高いのですが、それだけにやりがいのあるものだと思っております。

同窓の皆さんも各分野で活躍されておりますが、団塊の世代のノウハウおよびパワーを社会や文化の世界にも活用していくうではありませんか。

卒業20年を迎えて

(08A) 一 次 番 中

多田 元英 (A80)

卒業20年を機会に同窓会を6月末に開いた。その前に開いた同窓会が卒業10年目だったので、参加者20名のほとんどが10年ぶりの再会だった。同期生の全44名中関西在住者が26名と約6割を占めるため大阪で催したが、東京・徳島からも3名が都合をつけて参加してくれた。遠隔地のため出席できずに残念だとの便りもずいぶんといただいた。

10年ぶりの再会でまず感じたのは「皆、ずいぶん偉くなってしまった」ということ。しゃべる内容、腹の出ぐあい、頭の白さ・薄さ、役職…、何をとっても偉くなった。20年ほど前に我々の今の年(40代前半)だった大学での恩師や入社早々時の職場での先輩を思い浮かべると、それはそれはそうそうたる顔がよみがえる。その人たちの年齢に我々も達したということなんだろう。翻って我が身を思えば、年齢については動かせない事実だが実力や能力についてははなはだ不安な限りである。もっとも、髪の毛の本数については自分も多少偉くなった。

2時間あまりの1次会を終え、2次会、3次会と飲み続けた。しだいに学生時代の面影が随所に出てくる。ずいぶん偉くなったと思った旧友がそれほどにも感じなくなる。皆、それが年相応に20年分だけ偉くなっただけのようで、手も届かぬほどに偉くなったわけではなかったようである。そういう意味では、自分も20年分だけ偉になったと自信を持っていえるのだろう。

団塊世代の先輩たちが50代の半ばを迎え、今や我々の世代が中心となって社会に貢献すべき時期になっている。団塊世代に比べて我々世代は絶対人口が少ないので多少パワーに欠けるが年相応に貢献するための準備はできるようである。かつて先輩から言われたことば「最近の若い者は…」を後輩達にぶつけながら悪戦苦闘している毎日である。

次会を、10年後ではなく5年後に開こうということで同窓会を終えた。昔を懐かしむ会を頻繁に開きたくなるとは年寄りになってしまったということか。いやいや、まだそのような年ではないということを肝に銘じてがんばっていく所存である。



オリンピック・イヤーに想う事 —卒業後10年で…

中塚光一 (A90)

今年は今世紀最後のオリンピックであった。4年に一度のこの祭典に心を躍らせるのは各種競技の凌ぎ合いにワクワクするだけじゃなく、建築工学科1990年卒業メンバーによる同窓会があるからである。卒業してから10年。3回のオリンピックが開催された訳だが、たまたま1回目の同窓会が1992年のオリンピック・イヤーに行われたのがきっかけで、1996年の2回目、そして、「4年後に再会しよう」の合い言葉どおり、今年の2000年にもめでたく3回目の集いを実現した。

卒業生の約半数が、夏の暑い最中、京都に集い一晩を熱く語り明かした。猛暑なのに冷房の効かない部屋で鍋料理をしたから余計に暑い。相変わらず関西にいるもの、はるばる関東、地方からも集まって来たもの、様々である。見間違える程、変わったという奴はないにしろ、歳月の流れに逆らわずに成熟した面々ばかりであった。(ある意味では、歳相応に老けたという事だが。)相変わらずたわいもない話ばかりであるが、それゆえ気も張らなくて良い連中ばかりだ。一晩だけでも、食事をし、風呂に入り、酒を交わし、寝る。そんな時間の共有が、大切なひとときなのである。

10年前は、20代の前半であり、建築という学問に志しを持ち、社会の荒波に船出しようという時であった。30代の前半を迎えるこの10年間の間に、流されるがままに流されてきたような気がするが、今では、みな、家庭も築き、仕事も中堅という立場をむかえ、ある意味では充実した時間を過ごしてきたのである。普段は顔を合わす事も少ない面々でも、4年の空白を感じさせる事なく話が出来る。

新世紀が始まろうとしている。10年前のバブル期と比べると、建築業界に身を置いている者達にとっては苦しい時代である。IT革命の波が寄せてきているとはいうものの、この氷河期の氷を完全に溶かす事は、まだまだ難しい気がする。時代が変わる事を望むよりは、我々の力で時代を変えていかなくてはならないのかも知れない。そんな役目を背負っている世代のような気もする。

次の4年後に集い再会を果した時、30代の後半である。そのまた4年後経ったら、40代前半である。(2008年、大阪オリンピックだったら、なおさら盛り上がるだろう。)お互がどのような変化を見せているかは非常に楽しみだ。新しい時代の流れにまた飲み込まれ、厳しい世の中を生き抜き、ある時には、自分を頼りにしている家族を支え、それでも心を乾かすことなく生きていきたいものだ。

オリンピック・イヤーに乾杯!



大阪支部だより

大阪支部では、平成12年9月19日に見学会、総会、及び懇親会を行いました。

見学会は、快晴のもと、来春に完成予定の「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」と7月14日にオープンした「なにわの海の時空館」で行いました。

「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」の見学において、ジョーズの広場では、周辺の建物が風雨にさらされたように見せるため、新しい材料を古く見せる技術の説明を聞いたり、まだ水を張っていないジョーズの池では舞台装置の裏側を見ることができたり、次に行ったウエスト・スタンド・ショーのところでは、現在試験中であるとは聞いていたが、突然、樽が降りてきて、水が吹き出し、危うく、ずぶ濡れになりかけたりで、びっくりした場面もありました。その後、バスの中から1900年代初めのアメリカをイメージした町並みを見てまわったりして、120名の参加者も大変参考になったと大喜びでした。

また「なにわの海の時空館」では丸い形の建物の中に、実寸大の菱垣廻船や海と人とのかかわり等が分かりやすく展示しており、参加者もいちいち感心しながら、熱心に見てまわりました。女性会員の参加も多く、なごやかなうちに終了しました。

引き続き、ふれあい港館で行った、総会・懇親会には高原構築会会长長、大学からは専攻長の柏原教授(建築)、出口教授(土木)に来て頂き、111名の参加者はむかし話や近況報告などを報告しあって楽しいひとときを過ごしました。

役員会では、できるだけ多くの会員が参加できる機会を作ろうと、いろいろな工夫や試みを行いました。

今後の企画に役立てるため、参加者の少ない20代、30代の若い人を対象として、官公庁、ゼネコン、コンサルタント、鉄工、電鉄の5グループから、各々5名程度の会員を選び、グループ毎にヒアリングを、延べ7回実施しました。また、今まで大阪に住んでいるか、大阪に勤務している人を対象に案内状を送っていたのを、どこの支部にも入っていない京都、奈良、和歌山まで、送る範囲を広げました。さらに去年から若い会員の参加費を安くしています。

大阪支部の皆さん、今後とも、見学会、総会、懇親会の参加を待っていますので、気楽に来て頂きたいと思います。



なにわの海の時空館を見学して



ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの会議室にて

【題 (C73) 懇 人 山 中 员連隊】

【幹事長 石 田 貢 (C73) 記】

兵庫支部だより

兵庫支部は、毎年初夏の見学会、秋の総会を恒例行事として実施しています。平成11年度の総会は、建築工学専攻長の吉田勝行教授と構築会の真塚達夫会長を来賓にお迎えして、会員43名の出席の下で平成11年11月15日(月)に開催しました。この総会で12年度の支部長に入江恂一氏(A62)、副支部長に岸田威氏(C66)が選出されました。

総会と同時に、講演会を開催し、兵庫県まちづくり部営繕課の山本隆史氏(A69)より、「トルコ大地震被災地での支援活動に参加して」を題目に講演をいただきました。1999年8月に発生したトルコ地震への支援策の一つとして、阪神・淡路大震災で使用され役割を終えた約1,000戸の仮設住宅が、兵庫県からトルコ国へ提供され、山本氏は、この仮設住宅の建設を現地の技術者に指導するため、約30名の国際緊急援助隊専門家チームの団長として派遣されました。陸送から現地搬入に始まり、震災で最も被害の大きかったアダパザル市での、建設現場の住宅配置計画や工事に伴う調査、建築の仕方に至るまでの様々な貴重な体験を、スライドを交えながら語っていただきました。

その後引き続き懇親会を開催しました。

平成12年度の見学会は、7月7日(金)に、神戸市兵庫区南部で2001年秋に開業予定の地下鉄海岸線の御崎公園地下に完成した約4万m²の「和田岬車庫」及び既に搬入されていたリニアモーター式の新しい車両を見学しました。

さらに隣接して2002年のサッカーのワールドカップの会場となる「御崎公園スタジアム」の建築中の急ピッチで進む工事現場を見学しました。スタジアムは、延べ面積58,700m²、開閉式屋根、天然芝、収容人員42,000人で、ラグビー全日本平尾監督の、各国での球技場の経験から、観戦環境を重視したアイデアが取り入れられていました。

また、当日見学会までの時間と行程を利用して周辺にある、①兵庫津の道、②川崎重工業車両工場コースに分かれて、希望者による特別見学会を実施し、非常に暑い中を元気に徒步にて見学しました。見学会には38人の参加をいただきました。

見学会終了後に懇親会を併せて開催し、土木工学専攻長の出口一郎教授、構築会の高原彌次会長にも来賓として参加していただきました。会員30名の参加があり、暑い夏の盛りを徒步で3km近く歩いた後だけに、冷たいビールが喉越しに快く、楽しい一時を、見学会の話題から、最近の大学の事情まで幅広く歓談しました。

なお、兵庫支部の12年度の役員は下記の通りですのでよろしくお願ひいたします。

〔支部長〕入江恂一(A62) 〔副支部長〕岸田 威(C66) 〔監事〕亀本博文(C65) 西田泰悟(A68) 〔幹事長〕中山久憲(C73) 〔顧問〕松浦勢一(C53)、王 柏群(A54)、佐伯幸生(C57)、木村公之(A59)、明渡蒸輔(C65) 〔相談役〕神田徹(C63) 〔幹事〕山口征宏(C69)、志波秀明(C71)、佐俣千載(C71)、渡辺哲男(C71)、川谷充郎(C72)、橋本 彰(A72)、本井敏雄(C75)、泉 純一(A76)、榎原敏夫(C77)、道奥康治(C77)、園田 学(A78)、大原良夫(C79)、高橋利昌(C80)、桜井秀憲(C80)、富岡 洋(A80)、田谷孝壽(A83)、松井三思呂(C84)、秋川宏之(A88)、白井真太郎(C93) 〔敬称略〕



和田御崎車庫にて車両の説明を受ける



建設中の御崎公園スタジアム

【幹事長 中山 久憲 (C73) 記】

東京支部だより

東京支部では隔年毎に講演会を支部総会時に合わせて開催しています。平成12年度は、7月11日に第14回東京支部総会・講演会及び懇親会を開催しました。

21世紀も間近かという事で、建築分野からは「21世紀の建築界を考えて」と題しまして矢野建築コンサルタントの矢野克巳氏(A53)より今後の有るべき姿を中心に約50名の出席者による熱心な聴講と活発な意見交換がなされました。また、土木分野からは若手技術者を代表して阪神大震災時の復旧工事で大量に採用された「ハイブリッド橋脚(複合橋脚)の開発について」と題しまして住友金属工業の小林洋一氏(C78)より鋼とコンクリートの複合構造の挙動について紹介があり活発な意見交換がなされました。

懇親会では、高原彌次構築会会長、専攻長の柏原士郎教授(建築)、出口一郎教授(土木)を迎えて、81名の参加者のもと盛大に開催されました。

平成12年度は、支部役員改選の年ではありませんが、人事異動等に伴い若干の交代及び今後の若手会員とのパイプ役も兼ねて、以下の役員が選出されました。

支 部 長	吉尾 正彦 (A63)	幹 事	丑場 英温 (A78)
副支部長	柴田 陽一 (C66)	幹 事	永田 匡宏 (A78)
監 事	小林 勝一 (A71)	幹 事	池田 正人 (C78)
幹 事 長	井澤 衛 (CM79)	幹 事	津田 勝利 (C79)
幹 事	浅野 美次 (A71)	幹 事	前田 信之 (A81)
幹 事	中谷 行博 (C75)	幹 事	浜井 邦彦 (C82)
幹 事	栗本 雅裕 (C76)	幹 事	鬼丸 貞友 (A82)
幹 事	中谷 行博 (C75)	幹 事	三輪 恭久 (C89)
幹 事	梅谷 弘 (A77)	幹 事	松野 正見 (C97)

東京支部は、名古屋以東、北海道までという日本列島の約半分の広大な地域に渡っており会員数は約800名と規模的には1、2を争う支部だと思いますが、実はその活動は東京地区に集中しており全支部会員に対するサービスを如何に実行できるかが今後の課題です。



1950年代の卒業生の方々



2000年卒業生の皆さん

【幹事長 岡田 純一 (C75) 記】

愛知支部だより

愛知支部では、今年は名古屋駅のすぐ近くの名鉄グランドホテルにおいて、平成12年3月15日に20名の参加を得て、第14回支部総会及び懇親会を開催しました。

議事に入る前に、名古屋大学の谷川教授(A64)にお願いして、「コンクリート構造物の劣化と診断」と題して講演をしていただきました。講演時間を長くとれなかつたため、短い時間でありましたが、写真や図をふんだんに取り入れた最新の研究内容の講演は、山陽新幹線でトンネル覆工の剥離事故が世間を賑わせたあとだけに、皆さん興味深く聞け有意義な講演でした。

総会では、前年度の活動報告と会計報告がなされ、新年度の活動計画案についても合わせて承認されました。

懇親会では、自己紹介や近況を語り合い楽しいひとときを過ごしました。

今年の出席者は、昨年度史上最高の出席率の反動かいつもの20名前後となっていました。出席者が固定化しつつあることが気になるところです。

本年度は、総会・懇親会以外にも何かやろうということで、親睦ゴルフコンペを開催することになり、5月20日に伊丹副支部長をはじめ7名の参加を得て実施しました。

中部国際空港も着工された折、今後は他の支部でも行っている見学会をぜひ実施したいと思います。

平成13年も3月上旬に定期的に開きますので、まだこの会に出席されていない方々も特に若い方々も、固苦しく考えないで是非出席していただければと思います。

最後になりましたが、講演していただきました講師の方や総会のお世話いただいた役員の皆様に紙面を借りて御礼申しあげます。

出席者：佐伯幸生(C57)、森下弘士(C58)、伊丹惣三(C60)、三浦忠誠(A60)、池畠佳紀(A64)、谷川恭雄(A64)、宮村隆夫(C70)、安原良一(C71)、格清哲夫(A72)、矢野修一(C74)、奈良 敬(C76)、山本研一(A78)、青木伸一(C81)、降旗達生(C83)、安藤優子(A84)、入船百弘(AM85)、沖本孝之(A87)、鈴木正紀(C88)、野村明宏(C88)、木納利和(C93)



全員集合写真（総会）



全員集合写真（ゴルフ）

【幹事長 矢野修一 (C74) 記】

広島支部だより

構築会広島支部は、昨年1999年の5月に発足しました。

現在の会員数は44名で土木関係者が大半ですが、広島支部の発足が広島地区の会員、特に建築関係者に十分に知れ渡っておらず、会員数の把握を行っているところです。

さて、去る5月16日に広島工業大学にて2000年度総会を開催し、昨年度の活動、会計報告、今年度の活動計画が承認されました。

引き続き昨年度開催予定で延び延びになっていた江草支部長による講演会を開催しました。演題は『瀬戸内しまなみ海道 来島海峡大橋の架橋工事』で、長年に渡る緻密な施工計画と、実施工における感動や苦労話に聴講者は真剣に耳を傾けていました。

総会終了後は場所を市街に移し、小規模ながら会員による懇親会を行いました。

出席者は広島市近郊在住者、及び在勤務者が中心で、例年よく知り得た人々であり、和やかな雰囲気の中で近況報告など歓談の花を咲かせました。

今後は広島地区全域の会員の方にも広く参加していただけるように、恩師の先生方を来賓に迎えたり、各見学会の開催も計画していくと考えております。まだこの会に参加されたことのない方もお誘いあわせの上、是非出席して頂けたらと思います。

また会員の広島地区転入の情報などは、下記幹事まで御一報お願いします。

【幹事長 加 地 健 一 (C71) 記】

2000年度役員会報告

2000年度の役員会が本年5月19日(金)、大阪大学工業会会議室で開催されました。眞塚達夫会長、高原疆次副会長以下、学年委員の皆様に御出席いただき、1999年度の事業・会計報告(本部および支部)、2000年度の役員選出、事業・予算計画等の各議案に対する審議が行われました。以下に、議事内容の概略を報告いたします。

1. 1999年度事業報告および会計報告

担当幹事より、本部活動として 1) 役員会、2) 会員名簿・会報(構築会だより)の発行・配布、3) 記念品の贈呈、4) 支部活動への補助、5) 土木工学・建築工学両教室への事業補助、6) 会費滞納者への対応、6) 構築会を考える会の開催 の各事業内容等が報告され、続いて各支部代表者から支部活動をご報告いただきました。最後に、担当幹事による会計報告と監事による会計監査報告が行われ、審議の結果、報告内容がすべて承認されました。

2. 2000年度役員選出

本会会則第8条に基づき、2000年度会長に高原疆次氏(C65)、副会長に松尾純氏(A66)、監事に山辺健二氏(C83)と横田隆司氏(A83)、幹事長に西田修三氏(C教)、幹事に甲谷寿史氏(A90)が新たに選出され、大西弘志氏(C93)と吉村の両幹事が留任することが決定・承認されました。

3. 会費滞納者の扱いについて

事務局では1998年度から構築会の会費滞納者への対応を検討してまいりました。事務局案は1998年名簿に同封し、会員の皆様からのご意見をお願いするとともに、学年委員の皆様にアンケートを実施いたしましたところ、回答者の96.5%が事務局案(下記参照)に賛成という結果になりました。また「構築会を考える会」(1999年10月29日)におきましても、御出席いただいた歴代会長・幹事長、学年委員の皆様から圧倒的多数のご賛同をいただきました(P33参照)。以上の経過を役員会で報告し審議いただいた結果、2000年度から事務局案(下記参照)にしたがって会費滞納者に対応していくことになりました。会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

【事務局案】

- ① 会費の滞納者には、1995年度を開始年として、3年ごとに督促状を発送する(注:すでに実施中、次回督促は2001年)。
- ② 督促状を2回発送しても会費の納入がない会員には、「会員名簿」および「構築会だより」の発送を停止する。
- ③ 督促状は、3回目以降も引き続き発送する。
- ④ 会費が納入された場合、その年度よりの「会員名簿」および「構築会だより」を発送する(注:督促状2回目以降)。なお、発送停止期間中の会費は免除する。

4. 名簿サイズのA4化について

眞塚前会長のもと、1999年度事務局で構築会名簿(現行A5サイズ)をA4サイズ(面積2倍)に拡大する案のメリット・デメリットを検討してまいりましたが、名簿の見やすさ、名簿印刷費の大額節減等のメリットが勝ると判断し、検討資料を添えて役員会にお諮りしました。その結果、事務局案に多数のご賛同をいただき、2000年度から名簿サイズをA4にすることが承認されました。また、今後の検討課題として、名簿の隔年発行を検討中であることを報告いたしました。

5. 2000年度事業計画案ならびに予算案

西田新幹事長より、会員名簿・会報(構築会だより)の発行・配布、記念品の贈呈、支部活動への補助、土木工学・建築工学両教室への事業補助、役員会の開催、「構築会を考える会」の開催等の事業計画案、ならびに予算案の説明があり、審議の結果いずれも承認されました。

【1999年度幹事長 吉村英祐(A78)記】

構築会名簿のありかたに関する学年委員へのアンケート結果

1999.10.29

アンケートの設問

設問1. 名簿の発行形式の検討

構築会名簿は

1. 現状通り毎年発行する
2. 毎年発行しなくてもよい→_____年に1回発行(注1)

設問2. 会費と名簿代の分離

構築会名簿は

1. 従来通り全員に配布する
2. 会費と名簿代を分離し、名簿は希望者にのみ有料配布する

設問3. 会費の滞納者への対応

事務局の対応案に

1. 賛成
2. 反対
3. その他→ご意見をおうかがいします(注3)

その他連絡・ご意見(注2)

注1:回答に幅を持たせてある場合は短い方の年とした

注2:結果は別紙「アンケート自由意見」を参照

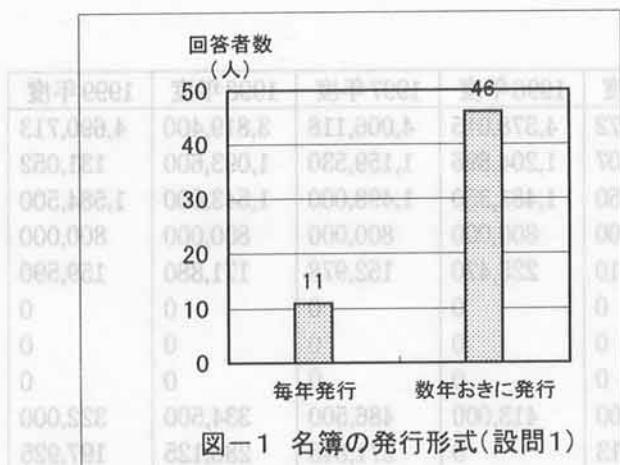


図-1 名簿の発行形式(設問1)

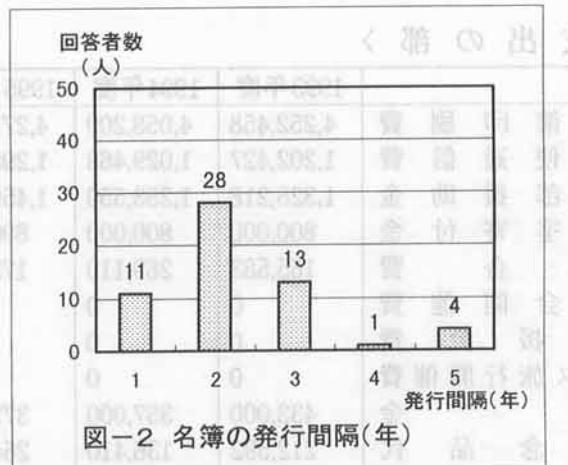


図-2 名簿の発行間隔(年)

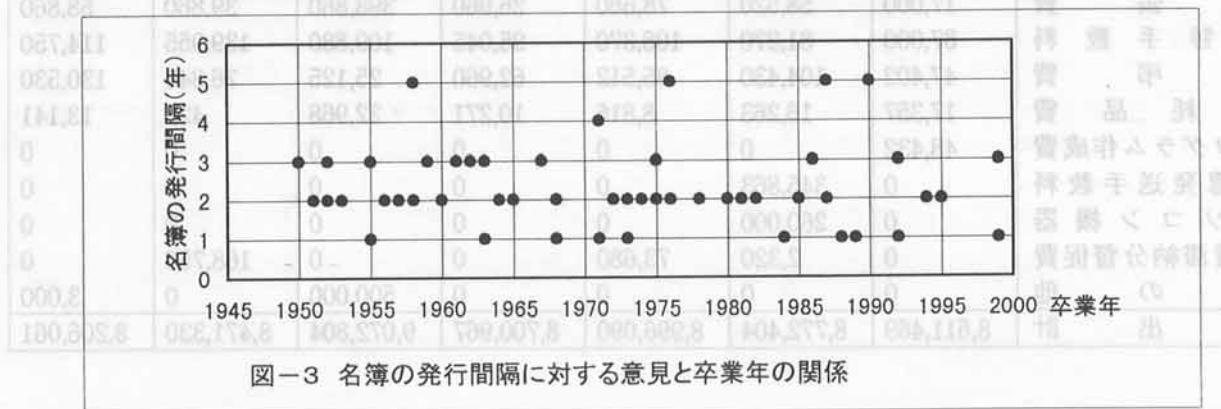
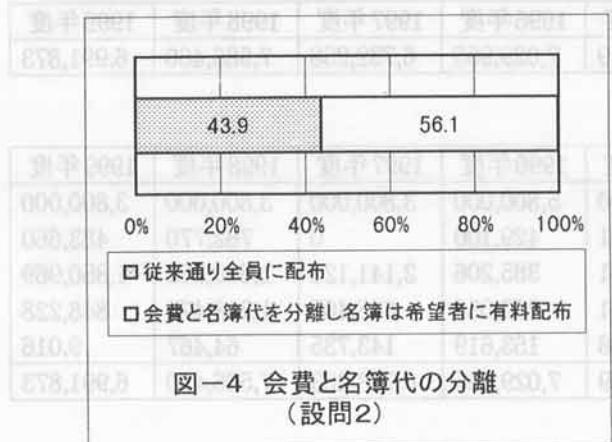
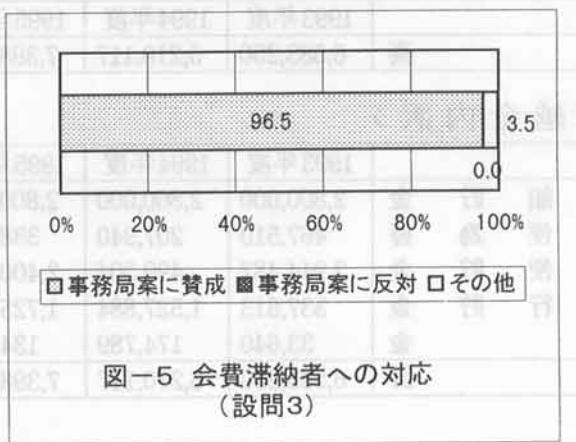


図-3 名簿の発行間隔に対する意見と卒業年の関係

図-4 会費と名簿代の分離
(設問2)図-5 会費滞納者への対応
(設問3)

1999年度会計報告

(平成11年5月1日～平成12年4月30日)

< 収入の部 >

	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度
会 費	6,056,900	5,636,000	8,980,000	6,489,500	6,826,800	8,182,500	5,949,500
広 告 料	2,017,219	1,738,043	2,197,905	1,837,837	1,778,270	1,140,000	1,660,000
利 息	35,351	25,228	7,017	4,636	7,476	3,032	1,974
寄 付 金 他	0	0	0	0	162,561	0	0
単 年 度 小 計	8,109,470	7,399,271	11,184,922	8,331,973	8,775,107	9,325,532	7,611,474
年 度 繰 越	7,085,249	6,583,250	5,210,117	7,398,949	7,029,955	6,732,258	7,586,460
収 入 計	15,194,719	13,982,521	16,395,039	15,730,922	15,805,062	16,057,790	15,197,934

< 支出の部 >

	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度
名簿印刷費	4,252,458	4,058,200	4,271,972	4,378,015	4,006,118	3,819,400	4,690,713
郵便通信費	1,202,427	1,029,468	1,298,307	1,204,896	1,159,530	1,093,600	131,052
支部援助金	1,328,218	1,253,550	1,455,250	1,481,350	1,498,000	1,543,000	1,584,500
教室寄付金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
会合費	165,583	269,110	173,710	228,470	152,978	171,880	159,590
総会開催費	0	0	0	0	0	0	0
後援会費	0	0	0	0	0	0	0
バス旅行開催費	0	0	0	0	0	0	0
謝金	433,000	357,000	377,000	413,000	486,500	334,500	322,000
記念品代	212,592	136,410	264,813	0	271,845	286,125	197,925
出張費	17,000	58,520	78,660	26,960	398,860	39,860	58,860
振替手数料	87,000	81,270	108,370	95,045	109,880	139,955	114,750
慶弔弔慰金	47,402	104,430	85,512	62,960	25,125	76,840	130,530
消耗品費	17,357	16,263	8,816	10,271	22,968	420	13,141
プログラム作成費	48,432	0	0	0	0	0	0
名簿発送手数料	0	345,863	0	0	0	0	0
パソコン機器	0	260,000	0	0	0	0	0
会費滞納分督促費	0	2,320	73,680	0	0	168,750	0
その他の	0	0	0	0	500,000	0	3,000
支 出 計	8,611,469	8,772,404	8,996,090	8,700,967	9,072,804	8,471,330	8,206,061

	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度
残高	6,583,250	5,210,117	7,398,949	7,029,955	6,732,258	7,586,460	6,991,873

< 繰越金内訳 >

	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度
定額貯金	2,800,000	2,800,000	2,800,000	5,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000
郵便為替	467,510	207,940	338,831	429,100	0	762,770	483,660
郵便貯金	2,944,487	499,504	2,400,241	385,206	2,141,121	1,640,752	1,850,969
銀行貯金	337,613	1,527,884	1,725,251	262,030	648,407	1,318,471	848,228
現金	33,640	174,789	134,626	153,619	143,735	64,467	9,016
合計	6,583,250	5,210,117	7,398,949	7,029,955	6,733,263	7,586,460	6,991,873

2000年度 構築会事業計画

事業項目	実施時期
1. 「会員名簿(A4版)」の発行・配布	2000年11月頃
2. 「構築会だより(A4版)」の発行・配布	2000年11月頃
3. 記念品の贈呈 〔構築会タイピン(男性)、ネックレス(女性)〕 新規卒業者・修了者 卒業10周年、30周年の会員	2001年3月 随時
4. 支部活動への補助 支部活動への補助金の交付	随時
5. 土木工学・建築工学専攻への事業補助	随時
6. 役員会の開催	2000年5月19日
7. 「構築会を考える会」の開催	随時
8. その他 会費督促(3年毎)は2001年度	

2000年度 構築会予算

収入の部			支出の部		
項目	金額	1999年度実績	項目	金額	1999年度実績
1. 会費	7,000,000	5,949,500	1. 名簿・会報等発行・配布費	4,950,000	5,143,765
2. 広告料	1,500,000	1,660,000	名簿印刷費	4,500,000	4,690,713
3. 利息	0	1,974	支部郵送費	100,000	131,052
4. 寄付金 他	0	0	通信手数料	350,000	322,000
1~4 小計	8,500,000	7,611,474	謝金	280,000	197,925
5. 前年度繰越金	6,991,873	7,586,460	2. 記念品代	2,500,000	2,384,500
			3. 補助金	1,700,000	1,584,500
			教室寄付金	800,000	800,000
			4. 行事・運営費	340,000	348,980
			行事費	0	0
			会合費	200,000	159,590
			出張費	40,000	58,860
			慶弔費	100,000	130,530
			5. 事務費	130,000	130,891
			備品費	0	0
			消耗品費	10,000	13,141
			振替手数料	120,000	114,750
			会費滞納分催促費等	0	3,000
			1~5 小計	8,200,000	8,206,061
			6. 予備費	7,291,873	6,991,873
合計	15,491,873	15,197,934	合計	15,491,873	15,197,934

〔五(略)三 竹田 西 貢津幹〕

会員登録会員登録 費率0005

会員の皆様には、平素から会の運営と発展にご支援をいただき、事務局一同厚く御礼申し上げます。お陰をもちまして、本年も「構築会会員名簿」と「構築会だより」を無事発行することができました。お気付きのように、見やすさと経費削減からサイズを倍化しA4版といたしました。この名簿サイズの変更をはじめ、役員会への提案と承認を得て、事業の一部見直しを始めています。以下、今後の予定も含めてご報告させていただきます。

1. 名簿隔年発行

会員名簿のA4化に続き、名簿の隔年発行について現在検討を進めています。隔年発行になった場合、休刊年度の新規会員および勤務先異動等の情報については、毎年発行される「構築会だより」に収録掲載する方向で具体案作りを始めています。この名簿の隔年発行が実施されると、広告収入は減少するものの印刷・発送費が半減するため、財政状況の好転が期待できます。ここ数年、会費の督促を実施した年以外は単年度決算が赤字を記録し、さらに広告収入の減少傾向が否めない状況の中、隔年発行への移行にどうかご理解のほどお願ひいたします。なお、予想される増収分の使途に関しては、構築会事業の充実等、会員への還元施策について検討を行っていくつもりであります。ご意見等ございましたら、お聞かせください。

2. 会則の見直し

昨年度の学科組織替えにより、土木、建築、船海、環境の4学科を統合した地球総合工学科が発足し、土木・建築工学科目(コース)への学生移行は2年次からとなりました。この改革に合わせ、会則5条の変更が行われ、また、名簿の隔年発行に向け会則15条の変更も必要となります。現在、次年度役員会への改正案の提示に向けて文言も含めて会則の見なおし作業を進めています。

3. 総会の開催

来年2001年5月1日の阪大創立70周年に合わせ、記念イベントが5月5日、6日の両日、大阪国際会議場で催されます。これを機に各同窓会集会の同時開催の提案が実行委員会よりありました。会則の改正等の役員会議決事項や構築会の現状報告、そして懇親の会を兼ねた構築会総会を、この記念イベントに合わせて開催する方向で、現在大学側と調整作業を進めています。詳細が決まりましたら、あらためてご案内申し上げます。その折りは、多数のご参加をお願いいたします。

おわりに、本号の発行に際しご多忙の中ご寄稿いただいた皆様に御礼申し上げるとともに、4,000名を超える会員名簿の点検修正作業に多大なご協力を頂いた教職員の方々に心より御礼申し上げます。

【幹事長 西田修三(C教)記】